

演題番号：A1

早期対策が奏功したボツリヌス症発生事例

○比嘉 歩，青木大介

NOSAI滋賀家畜診療所東部

1. はじめに：令和5年3月から管内1農場（A農場）において後躯麻痺を主徴とする起立不能や突然死が散発し、4月にはA農場から500m離れた1農場（B農場）でも同様の事故が続発した。2農場で共通する臨床症状と近隣県での発生報告からボツリヌス症を疑い、大阪公立大学に検査を依頼した。結果が出る前にボツリヌスワクチン（キャトルウィンBO2、ささえあ製薬、以下ワクチン）を2農場の全頭に接種した。ボツリヌス毒素は陰性だったが、ワクチン接種後に2農場で事故発生がとまったため、ボツリヌス症の可能性が示唆された。同年7月から管内1農場（C農場）において後躯麻痺からの起立不能が短期間に複数頭発生した。A・B農場の事例からボツリヌス症を疑い、早期に対応したことで発生の拡大を防止できたので概要を報告する。

2. 農場の概要と発生状況：C農場は第一農場に黒毛和種繁殖母牛51頭、肥育牛約500頭、第二農場には肥育牛約2000頭の計約2550頭を飼養している。第一農場において、7月7日に1例目（C1）、10日に2～4例目（C2～C4）が後躯麻痺を主徴とする起立不能により病畜出荷となった。臨床症状や発生状況からボツリヌス症を疑い、C2・C3について大阪公立大

学に検査を依頼した。

3. 結果と対策：農場、家畜保健衛生所と対応を協議し、7月13日に第一農場の550頭全頭にワクチンを接種（4週間間隔で2回）し、第一・第二農場へ防鳥ネット設置などの衛生指導を行った。18日にC3の糞便からボツリヌスD型毒素が検出されたため、5km圏内の9農場に衛生指導を行い、C第一農場に隣接する2農場と希望する1農場の全頭にワクチンを接種した。7月27日までに5頭死亡し、12頭病畜出荷した。その後、一時的に発生が止まったが、2回目のワクチン接種後の8月23日から27日にかけて5頭死亡し、1頭病畜出荷した。C第一農場の5km圏内の農場では現在までボツリヌス症を疑う事故の発生はなかった。

4. 考察：A・B農場の事例を参考に、臨床症状や発生状況からボツリヌス症を疑い、早期の検査と疑義段階の対策によりC第一農場から他の農場への発生拡大を防止できたと考えられる。また、ワクチンを2回接種した後にも発生があったことから、ワクチン接種だけでは発生を完全に防止できないため衛生管理を徹底することが重要であると考えられる。